大槌町の現在と未来

――震災から11年たって

2011年の東日本大震災の時に、ご縁があって支援に入った岩手県大槌町の今について、当時、自身も被災しながら「まごころ広場」などのコミュニティを活性化する活動をしていた臼澤良一さんにお話を聞きました。臼澤さんは、現在大槌町の町会議員をしながら、NPO法人遠野まごころネットの活動も続けておられます。

大槌町最近の様子

大槌町子どもセンター
ご寄付などで建築し町に寄贈したが、10年たった今年、残念ながら都市計画に基づき解体された。

震災後ずっと町を歩いてきた中で見えてきたのは、確かに道路や公共施設などのインフラは整備されましたが、気づいたらコミュニティがなくなっていることです。被災前は人口が1万6千人、町の予算は60億円程度でした。被災後、人口が1万1千人に減った町の2011年の復興予算は約800億円でしたが、その後毎年少しずつ予算が減り、22年は約100億円となり、23年以降は震災前の予算額になると予想されます。一方で、町の高齢化率は34.1％となり、高齢者が不安を抱えて生活している実態が浮かび上がっております。年金は減り、公営住宅の入居料も値上がりし、「新聞を取るのをやめた。固定電話を解約した」という話を聞きました。「寄り添う支援」というその内実が問われています。メディアや町の応報では、笑顔や前向きの話が溢れていますが、内情はどうでしょう。

仮設住宅の時には狭さや不便さ、落ち着かなさなどの問題があった一方、隣近所の息遣いが感じられ、付き合いがありましたが、復興公営住宅に移ってからは、そういうものがなくなっています。扉を閉めると「刑務所のようだ」といった方もおられました。大槌・釜石地域では、新型コロナの陽性者数が少ないので、町の皆さんは都会ほど神経質にはなっていなかったにもかかわらず、「お茶っこ（近隣の人たちが集って茶飲み話をする風習、被災後は非常に盛んだった）」を開いても、支援者のほうが利用者よりも多いことが珍しくありません。

震災後に、復興予算で建てられた公民館や図書館などの立派な施設が各地域にできました。そこには、常駐の管理人もいますが、住民が気軽に使える場所ではなくなっています。建設にあたり、住民の意見が反映していないからではないかと思います。大槌町には震災前から地元NPO法人の活動があり、現在もそれぞれの得意分野で活動していますが、町の様子をみると偏った団体に予算の伴う多くの事業を委託しているように見受けられます。町内の団体を育成するのも役場の責務と考えます。

三陸では、温暖化の影響で漁業が大打撃を受けています。大槌の主な収入源であった秋サケの水揚げは激減し、ウニやアワビも磯焼けで深刻な被害を受けています。温暖化や環境保護などの話をすると「環境では飯は食えない」と、漁業補償や補助金に話を持っていきたがります。しかし、補助金に頼っても補助事業は2、3年で終わってしまいます。こうした補助事業に頼る考え方は震災後も変わってないように見受けられます。「議員だより」で町のやり方を批判すると、匿名で「余計なことを言うな」と非難の電話が来ることもあります。

しかし、今が最悪の状況だと考えて、仕組みを変えていくための種蒔きをと考えています。例えば、補助金に頼らないでも経済を回せるような小商い、じいちゃんや、ばあちゃんに日銭が入るような地域内の流通を作ることなども必要だと思います。

大槌は日本の縮図だと思っています。でも小さい町だからやれることもある。そういう意味では「フロントランナー」なんです。希望を作ることが役割だと思いますし、今日よりも明日を少しでも良くしようと、日々歯を食いしばって活動していきたいと思います。（6月22日談）